

た。一瞬一瞬が生活の一節であり、極限状態化して生活を客観視すると、時間は「動き」「流れ」そのものである。以上を生活の属性と側面に連関させて考察して、生活の目的、手段、運営へと方向づける。

F-14 生活の構造について (そのII)

岩手県立盛岡第二高校 工藤 澄子

1. 昭和42年度本学会において、生活の構造について(そのI)では、生活の構成因子としての自然的因子を生活の内包的構造として発表したが、今回は生活の外延的構造として文化的因子をとりあげて生活の構造的連関を明らかにする。

2. 諸文献、各種社会調査結果資料等を参照して考察した。

3. 人間が個人としての生活の基本的要素として、A生活の主体、B生活の客体、C生活の空間、D生活の時間の四つが相互に内含、滲透の関係にある。さらに社会から孤立して社会や文化と全く無関係になるということはありません。まず生活の面から「文化」の概念を規定した後、内包的因子が、社会の文化的因子とどのように連関しているのか、その構造図を示めし、自然的因子Aは、家族、地域、社会の人間関係、生活意欲、意識、倫理に、Bは労働力や社会経済機構と関連しつつ生活経済に、Cは自然的、社会的環境と生活空間が職場、住宅に大きな問題を投げかけ、Dは人間、家族、制度の変遷として捉え、歴史に記述されてない部分があったとしてもなお存在してきたと考えられる人間の生活史として捉え